

図書館通信 —55—

1981. 4

浜松分館の充実と発展のために

浜松分館長 大月卓郎

昨年の5月、はからずも分館長という大役をお引受けすることになってから一年が過ぎようとしています。分館図書委員の経験さえなかった私に果たして勤まるかどうか不安でしたが、幸い関係する教職員の御協力と御支援をいただき、どうにか現在に至っています。残る任期の一年もよろしくお願い致します。

十数年前、多分コンシューマー・レポート誌だったと思いますが、カナダの大学を5段階に評価して紹介した記事がでていました。大学も商品並みというプラグマティックな取扱いが面白かったのを覚えています。またその評価の基準が、先ず附属図書館の規模、次いで学部の数、各学部の特色と学問的レベルであったのが強く印象に残っています。この雑誌の性格からいって、相応の重みを感じさせる基準ですが、わが静岡大学にあてはめるとどうなるのでしょうか。図書館の事情が多少わかってみると、心許ない気がします。

更に、図書館をとりまく状況は当時と比較にならない程大きく変わっています。殆ど爆発的といつてよい学術情報の増加、資料費をはじめとする諸経費の高騰、電子工学、情報工学関係の技術の進歩等どの一つをとってみても、これまでの図書館の在り方に大きな変革を迫るものです。全国的な規模の対策として、学術情報システムの構成(近藤閲覧課長による詳しい解説が『図書館通信53号』にあります)、図書館情報大学の設置等いろいろあるにしても、結局各大学の的確な対応が必要となります。

さて、上に挙げた学術情報の増加が理工系の分野において特に著しいことから、その影響を最も強く受けるのは工学系図書館である浜松分館ということになります。この点については、『図書館通信54号』の座談会「研究者とレファレンス・サー

ビス」に久保教官の対応策を含めた鋭いコメントがあります。是非御覧下さい。

浜松分館においては1972年に新しい建物ができて以来、主に学習図書館としての機能充実に力が注がれてきました。同窓会の援助もあって、施設面では現在でもなお平均以上の水準が保たれ、これがまた利用状況に好影響を及ぼしています。しかし研究図書館としての機能は、建物面積の不足、学術雑誌の分散配置等の事情のため、不十分のままになっています。井本前分館長はこのような状態を改善するとともに、外部の変化に対応するため、早くから浜松分館の改革を検討され、研究図書館機能の拡充を中心とした基本計画を引継事項として提示されました。昨年度、その線に沿った分館の増築と学術雑誌の集中化について関係部局の合意が得られましたので、今年度は概算要求とそれに伴う分館の将来構想の具体案作成が課題となります。いずれも分館図書委員会を中心に検討中ですが、後者については以下の項目を設定しています。

1. 施設整備計画 (1)増築計画 (概算要求と重複) (2)現分館の整備計画 (3)環境整備計画
2. 資料整備計画 (1)収集計画 (2)財政計画 (3)配置計画 (4)学術情報ネットワークへの参加

もくじ

浜松分館の充実と発展のために……………	1
ある回想……………	2
教官著作寄贈図書……………	3
図書館と私……………	3
「重新静岡新聞」「絵入東海新聞」等 明治前期静岡県内紙について……………	4

3. 運用・サービス計画

4. 組織整備計画

各項目それぞれ問題を抱えており、慎重な検討が必要です。特に3、4項は、重要でありながら最も難しい要因の問題と関連し、はっきりした見通しがつかない現状です。妥当な案を作り、その実現のため持続的な努力を続けるより他に途がありません。

以上簡単ながら分館をめぐる諸問題について述べてみました。西部キャンパスの将来と考え合わせて、御理解いただきたいと思います。また御意見をお寄せ下さるようお願い致します。新館の休憩室が勉強・研究の疲れをいやす場であるばかりでなく、利用者相互の親睦の場、異なった専門分野の研究者の交流の場ともなり、人間の絶間がない——そういう分館にしたいと希っています。

利用者のみなさまへ

1. 開架閲覧室（5階）の図書の配置場所が変りました。

新年度より5階開架閲覧室の図書の配置を変えました。配置図は開架閲覧室の入口に掲示してありますので参考にして下さい。図書の配置の変更と共に、今迄指定図書と一般開架図書が別々に配置されていましたが、指定図書の冊数が年々増加するに従って一般開架図書と指定図書の2ヶ所で図書を探す不便の声もあり、同一図書、同主題の図書を1ヶ所で探すことができるように昭和54年以前の指定図書は一般開架図書と一緒に並べました。なお、一緒にしても指定図書の識別はできるようにしてあります。指定図書のうち、最近2年間分は講義との関連性も強いので、別にコーナーを設けて配置してあります。

2. 自然科学系外国雑誌室（3階）の集中雑誌がさらに充実しました。

自然科学系外国雑誌の集中は、昭和54年度に数学系、昭和55年度には物理学系の大部分と化学系の一部が集中され、昭和56年3月31日現在、バック・ナンバーを含め約300タイトル（カレント誌約230タイトルを含む）が巻号の調査や配置も完了し利用できるようになりました。現在、カレント誌は続々と1981年の最新号が到着しております。また、集中化した雑誌及び外国雑誌購入費で購入した雑誌の全タイトルの所蔵目録（冊子体）も完成し、利用の便を計っていますので大いに利用して下さい。

ある回想

杉山忠平

はじめてイギリスへ行ったときは船旅で、最初の寄港地はホンコンだった。寄港地というより、船をそこで乗りかえねばならず、次の便まで何日かの滞在を余儀なくされた。そこでホンコン大学を訪ねてみた。植民地大学という先入感があったが、ほかに行くべきところも多くなかった。

折あしく休暇中だったが、図書館は開いていた。それで図書館をみた。大学もこじんまりしていたが、図書館もそうだった。ただ、接架制と夜間開館には——会った館長が婦人だったことにも——目を開かれる思いがした。わたしにとってはこれが最初に見る外国の図書館だった。もう25年もまえのことだ。

イギリスでの生活の大半は下宿と図書館とを往復することに費されたようなものだから、図書館の印象は他の何よりも深い。日本の大学図書館しか知らないわたしを驚かせたホンコン大学の図書館のありようは、実は、他のさまざまなこととともに、近代図書館にとって自明の前提なのだと知ったのだった。

いまでこそ静岡大学でも、小規模ながら開架制も実施されているし、夜間開館などはとても高言できないほどのものではあるが、ともかくも、それも着手された。だが、これまでの道のりは長かったし、これからの道のりもまだ長そうだ。

大岩地区時代のいつごろだったか、旧制静高らしいのちいさな木造図書館に代わって、鉄筋コンクリートのいくらか大きな図書館が建てられることになった。図書館改革には無二の好機にみえた。事務長や館員にもその機運はあった。

もう古いことで、事柄の順序や内容に記憶ちがいもあるだろうが、それを恐れずに書く。わたしは教育学部図書委員長に選ばれた。しかし一学部の委員長では全学にたいしてほとんど関与しようがない。幸いに図書館長と同じ学部の島谷教授になった。図書館長をとおしてなら、何ほどのイニシアティブがとれるかもしれない。

新図書館は中央図書館にならねばならない。教育学部図書室は付属図書館に統合された。付属図書館を真に全学的な性格のものにするために、図書館委員会、東部図書館委員会などの機構が発足した。

しかし形だけは一応ととのっても、内実は旧態依然だった。何よりもまず、図書館は各教官が公

費で購入した本をただ登録するだけのトンネル機関にすぎなかった。図書館でラベルをはられると、本は注文者である各教官の研究室に直行した。貸出期限もなきにひとしく、半永久的に各研究室の書棚におさまったままだった。公有物である本が実際には私物同然だった。静岡大学だけのことでない。古い大学の多くがみなそうで、新しい大学である静岡大学もその弊を分有したにすぎなかった。

辞典やその他の参考図書類でさえ教官研究室が優先していた。司書が図書館用に図書を選定し購入するための予算も事実上皆無だった。それでいて、分散主義のために、乏しい予算で同じ本があちこちで重複して買われていた。

開架式だの夜間開館だのは、夢のような遠い次元のことに思われた。付属図書館を中央図書館にするには、まず集中主義の実現から始めなければならない。

図書委員には権力がない。図書館長にすらない。各教授会をとおしてアピールや説得を続けるしか方法がない。抵抗は最初から予想された。一挙にはとても無理だった。やむなく「基本図書」という範疇を設けて、「研究室備付図書」(研究室貸出)のカードを一般の個人貸出カードとは別に作製してもらった。同時に教官の個人貸出期限を本来あるべき姿よりもずっと後退したものに定めた。残念だが妥協するほかなかった。それでも抵抗は強かった。しかしこの2つの妥協策によって、集中主義はともかく緒についた。思いのほか短日日に、とさえ言ってもよい。理解ある教官も少なくはなかったからだ。

大谷地区に大学が統合移転してからの現在の付属図書館の基礎は、よかれあしかれ、こうしてこの時期に作られた。その基礎がゆらいだかどうかは、いま各人のみとおりだ。当時のことを知る人びともずいぶん少なくなった。その少ないひとりであるわたしもまた、静岡大学を去ろうとしている。付属図書館の発展を願うや切なものがある。(1981. 2. 28) (教育学部・経済学)

[4月より一橋大学社会科学古典資料センターに転任。]

■教官著作寄贈図書

高橋洋児 (法経短期大学部)

『経済学 I』 (有斐閣大学双書)

桜井毅他編・高橋洋児執筆 有斐閣 1980
(331/Sa 47/1 開架)

図書館と私

梅沢敏郎

4年前に東京の永田町にある国立国会図書館に行ったときのことである。貸出しを待っている間にカウンターの上の方に「H ΑΛΗΘΕΙΑ ΕΛΕΥΘΕΡΩΣΕΙ ΤΜΑΣ」と書かれているのに気が付いた。これは「真理はあなたがたを自由にするであろう」という意味のギリシア語の文である。私はこれを読んだとき、図書館にこのような文が書かれていることに感銘を受けた。国会図書館に行ったのは資料を調べるためであったが、考えてみるとかく専門的または部分的に物事を捉え、足れりとする傾向が強い。また事実そのような行動・努力がなければ、現実にも物事を進めて行くことはできないであろう。しかし日毎の知識を集めた総体が、自分自身に対してまた自分と他人の間に対してどのような意味をもつものであるかは、また別の問題として考える必要の有ることである。そして図書館という組織がその一助として傍にいるということ、またそのように活用することができるということを教えているように思われる。

————— * —————

図書館の機能について人が期待することは必ずしも同一でない。その中で一般的には、資料或いは情報の提供に大きな関心があると思われる。勿論個人の研究者同志の通信、シンポジウムにおける討論等を通じて必要な情報を得ることができるけれども、基礎的或いは組織的な探索の方法として図書館に期待する面も大きいのである。

私は現在、数学を専攻しているけれども学生の時に化学を専攻したことがあった。卒業実験で或るテーマを与えられ、装置を組み立てまた必要な文献を集めたのである。知りたい資料を求めて理学部のみならず工学部等の関係ありそうな研究室を訪問し、文献を調べさせてもらったりした。多くの先生方に好意的にして頂いたが、或る時同僚の学生から、「或る先生が君のことを学生のくせに生意気だと言っている」ということを聞かされた。その時私は疑問を感じたことを記憶している。というのは、文献または資料というのは本来、私のものではなく公のものとして必要なすべての人に利用されることを当然のことと見ていたからである。しかし同じ事を二度とする気にはなれなかった。或いは言動に失礼な点があったのかなとも思うし、また戦後の窮乏の時代に文

献は今よりずっと貴重だったのかなとも想像するのであるが今でも基本的には私は正しかったと信じている。もし図書館が十分機能し、これらの文献等を共同の資産として管理し、必要な人々が自由に利用できるのであれば良かったと思う。ただし文献保護のため必要な措置を取ることは差支えない。

資料または情報の組織的提供者としての図書館の役割は今後いよいよ増大するものと思われる。最近、学術情報システムが話題にのぼるようになった。未だ先のような気がするけれどもエレクトロニクスの進歩を考えると、やがては身近になるであろう。私は昭和30年代前半から電子計算機を折にふれて使用する機会をもった。東大工学部におかれたTACという真空管式の日本での初期の計算機を使用した頃のことを思うと、現在東大大型計算機センターに単一システムとしては世界最大級のコンピューター・システムが導入されている状況は驚くばかりである。いまは夢のような各種の情報処理もいつか実現する日が来るかもしれない。その時でも多分図書館はそれぞれの大学における学術情報の拠点として活用されていくものと思われる。というのは情報の効率的な活用のためには集中が必要であり、また利用の面を考えるとあまり不便では活用しにくいからである。

*

毎日あわただしい日が過ぎていく。世のため、人のため、自分のため全力を尽くして生きるが良いと思う。しかし二度ともどらぬ日のために、この世界が自分の知っている専門の世界よりもっと広いものだとことを知りたいものである。不十分ではあるが、図書館はこれらの世界への道案内であり得る。若い学生諸君が広く心を開き専門にこだわらず、図書館を活用されんことを望むものである。
(理学部・数学)

右下より→

明治20年8月2日～明治21年4月29日
明治21年7月1日～明治21年7月31日
明治21年9月2日～明治21年10月31日
(以後「東海日報」と改題)

東海日報

明治21年11月1日～明治21年11月30日
明治22年1月4日～明治22年4月30日
明治22年6月4日～明治22年6月29日

(図書館・運用係長)

「重新静岡新聞」「絵入東海新聞」等 明治前期静岡県内紙について

春山俊夫

このたび、静岡県小笠郡大東町上土方の鷺山家と静岡県周智郡春野町気田の酒井家のご好意により、明治前期の「重新静岡新聞」「静岡新聞」(以上鷺山家所蔵)および「絵入東海新聞」「東海日報」(以上酒井家所蔵)のコピーを静岡大学附属図書館に保存し、利用者に閲覧できるようになった。

本館には明治30年代から大正期にかけた静岡県内の地方紙および全国紙の地方版を含んだ新聞コレクション「河井文庫」があり、多くの研究者に役立ってきたが、明治前期の同種の新聞は一般の公的機関では東京大学明治新聞雑誌文庫や日本大学三島図書館等に一部を所蔵しているのみである。

こうしたことが利用者とともに不便を感じていた私は、たまたま、昨年(昭和55年)8月に明治大学の海野福寿教授(前本学法経短期大学部教授)一行の鷺山家所蔵の新聞雑誌の調査に参加した(このことは静岡新聞昭和55年8月29日付で報告された)。その折に発見された膨大な新聞類の中に前述「重新静岡新聞」「静岡新聞」があった。この新聞は、明治10年代初めの代表的な静岡県内の地方紙であり、当時のこの地方の情勢を知る貴重な資料であるが、今まで一般の研究者が閲覧できる図書館には所蔵していなかった。

酒井家が所蔵する「絵入東海新聞」「東海日報」は、本学教養部田村貞雄教授の調査で発見されたものの一部である。「絵入東海新聞」は明治20年4月4日に静岡で創刊され、明治21年11月1日より「東海日報」に改題されている。「絵入東海新聞」は創刊より明治21年3月末日までを昭和47年に復刻版として出版されているが、この復刻版所載以後の同紙の刊行は、田村教授の調査までは発行自体を確認されていなかった。

今回コピーした新聞は次のとおりです。

重新静岡新聞

明治10年1月6日～明治10年3月24日

(以後「静岡新聞」と改題)

静岡新聞

明治10年3月26日～明治11年8月29日

明治11年10月1日～明治11年10月31日

明治12年12月3日～明治13年10月31日

絵入東海新聞

←左下へつづく